

どうぶつたちが見上げる空ば (43)

なかの まきこ

ウイズ コロナ アフター コロナ
～コロナに感染しました～

少しずつ色づく木の葉、足元に転がるとんぐり、どこまでも高い空。日本一標高の高いという野辺山駅(JR 小海線)で下車して、ぼんやりと流れる空気を味わっていた。1 か月少し前の、あの「コロナカノ劇場な日々」を懐かしく？思い出しながら・・・。

そう、わたしは8月下旬、コロナに感染・発症したのである。あのドタバタの苦しい日々は、忘れようにも忘れられない。発症して1週間後、容体が急変した。37℃台、血中酸素濃度96-98%で推移していたので、これでおさまるだろうとタカをくくっていた。それが朝目覚めたら妙に息苦しい。体温は39℃を超えていた。酸素濃度は93-96%をいったりきたり。心拍数は150に迫る勢いだった。解熱剤(アセトアミノフェン)を飲もうと、友人が大量に送ってくれた経口保水液を口にして気づく。味も匂いもまったくわからないことに。

「はじまった～！」というのが、わたしの最初の感想だ。まずは落ち着こう。

アイコス(加熱式タバコ)と芋焼酎の水割りという神セットで一息。(因みに、アルコールとタバコは本当は控えなくちゃいけないんだって!)保健所に電話しても、自宅待機と解熱剤のことだけしか言われない状況。なぜなら、このときは東京は感染爆発を起こしており、病院のコロナ病床は満床状態、救急車も呼んでも来ないか、たらい回しにされるという話がニュースでも取り上げられていた頃だ。苦痛よりも恐怖が上回っていた。

解熱剤を飲むと、少しは熱がおさまる。そ

して数時間後にはまた39℃台に戻る。その繰り返し。結局、動物用イベルメクチン(注射液・・・よいこは真似をしないでください、と一応書いておく)を1回だけ服用した。あとは、野となれ山となれ・・・という心境だった。

だかしかし。ここでわたしは気づく・・・。まず、万が一のときに、多くの人に連絡がいかないことを。さらに、乱雑に散らかった汚部屋の片付けを、誰かに頼まなくてはいけないことを・・・。解熱剤を飲むと少し体温が下がるのをみて、そのときに休み休みつくったのが、「緊急時連絡網」(これは画用紙にマジックで書いた)と「遺言書」(法的に有効なように自書・署名・実印入り)である。肩で息をする状態だったのだが、これらを作成しているとき、不思議と安らかな気持ちになるのを感じた。特に、遺言書のさいごに「幸せな人生でした!ありがとう!」と書いたときの、爽快感と達成感と多幸感は忘れがたい。保健所と東京都の福祉保健局からは、その後電話がかかり、「ホテル療養への移行」を勧められたが、断った。「もういいや」と思ったのは、ホテルの部屋も自宅も、医療や検査が受けられないのであれば意味がないと判断したことによる。(ホテル療養だと、お酒もタバコもNGらしい・・・という噂を耳にしたから・・・ではない、NEVER!(笑))

高熱は続いたが、結局、半月以上に及ぶ自己監禁生活は終わりを迎える。その間、体調と相談しながら、「日報」と称したメルマガ「コロナカノ劇場」を数十名の方々に送っていた。同じくコロナに感染した友人知人や、獣医や看護師の友人たちから寄せられる情報も非常に貴重だったので、これらも発信させていただいた。

「もう外に出てもいい」というOKを保健所にもらって、一歩外に出たときのあの感動! 半月以上ぶりに出た外界は、本当にキラキラしていた。流れる雲、虫の羽音、飛び立つスズメやハト、雑草の葉の緑のグラデーション、すべてが鮮やかで美しく、心にまっすぐ刺さった。何気ない日常が、こん

なにも尊いということ、喉元過ぎても忘れないようにしたいと思った。

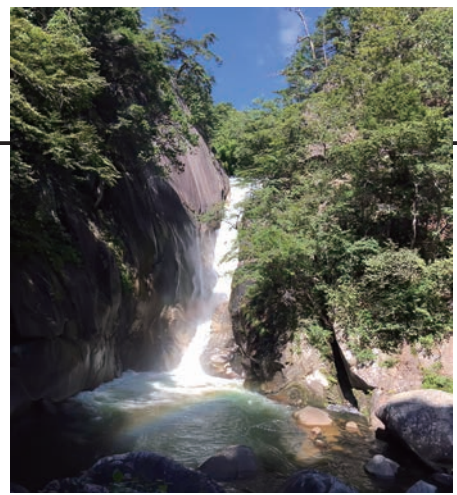
そして。本気で心配してくれた友人たち。経口補水液やゼリー飲料、レトルトのスープや各種食料、肌着や酸素缶に至るまで、多くの物資が玄関前に山のように届いた。うれしい悲鳴だった。深夜、車を飛ばして薬等を届けてくれて、毎日二回安否確認電話をしてくれたクラスメイトの獣医、仕事の後に大量の食料を差し入れてくれた友人、近所の飲み屋のマスター、彼女彼らの姿をモニター越しに見た時の安堵感と感激を忘れない。外出できるようになってからは、リハビリ散歩につきあってくれ、「金木犀の香りが今わかった!」とはしゃぐ私のうしろで涙を流してくれた人もいた。「生かされている自分」をあらためて感じ、みんなに感謝した。わたしは幸せ者だ。と。

コロナに実際に罹患して感じるのは、コロナには大きくわけて3つの苦痛があるということだ。「肉体的苦痛」は当然だが、これに「精神的苦痛」(医療を受けられないこと、急変に対する恐怖、閉塞感等)と、「社会的苦痛」(コロナに感染したことが悪のように扱われたり騒がれたりする現象、噂話、職場の無理解など←※わたしは幸いこれには遭っていません。)を伴いがちである。疾病を正しく理解し、正しく恐れる、ということが重要だと改めて思った。

さて、今はコロナ快復?から1か月以上たったが、後遺症はまだある。しかし、嗅覚も味覚もゆっくり回復してきており、脱毛や倦怠感、動悸は気になるが、週に1回の短大の講義に片道1時間半かけて通い、同じく同距離の会社にも顔を出せるまでになった。

一番の後遺症はというと、「休みの日にじっとしていられない」症状だ。あの閉じ込められた感の強すぎた半月の時間を取り戻すように、自然の中に、あるいは行ったことのない近郊スポットにオデカケをしている。今は階段も坂道もゆっくりではあるが登れるようになったし、次の休みはどこへいこうかなあと計画をするのが楽しくて仕方ない。この感じを、当分大切にしていきたいな。

いま、わたしは、「生きてること」を全身全霊で味わっていると思う。そう、わたしは生きている。思い切り。移ろいゆく空を見上げながら。



昇仙峡



↑山梨県の昇仙峡にて。遊歩道リハビリ散歩。